

過疎・少子 それがどうした 島の教育



保育園児・小学生・中学生も参加し、老若男女すべての心が響き合う中島文化祭



金本 房夫
松山市中島総合文化センター
所長兼中島公民館長

学校像を「楽しい学校」ではなく、「苦く楽しい学校」と言ってきた。「楽しい学校」が「楽しい学校」が「苦しいけれど、楽しい学校」の意である。

少子化がすすむ中での 市町村合併

中島町が松山市に合併する時、いの一
番に思ったことは、中島町教育委員会が
主催していた子どもたちの行事をいかに
して残すか、そして、中島が育み育てて
きた学校文化をいかに継承・発展させて
いくかであった。

学校は何のためにあるか、子どものためにある、子どもの幸せのために存在する。子どもの幸せのためには何か。それは、子どもの今生活している幸せのためばかりではない。子どもが将来生きていくための幸せを保証する。つまり、子どもの未来保証こそ、学校存在の大原則なのである。



小学生演劇「まんべえみかん物語」

すべての行事を、公民館活動や中島総合文化センター事業・海洋センター事業等に位置づけて残した。

そう考えると、「楽しい学校」など浮かれているわけにはいかない。子どもたちが大人になったとき、「心豊かにたくましく」生きていくための人生の基礎・基本や、学力の基礎・基本をしつかりと身につけさせることに全力で取り組む学校こそ求められている。よい学校とは「楽しい学校」ではない。ホンモノの生きる力を育む学校、子どもが育つ学校でなくてはならない。私は目指す

また、従前から行なわれていた「集合学習」も継続・発展させることとし、更に「小中合同音楽会」は音楽の、「小学校陸上記録会」「水泳記録会」は体育の「集合学習」として残して現在もダイナミックに活動している。

中島の小学校は8校。二神小学校の全児童3名。野忽那小6名、怒和小7名、一番児童の多い東小で76名。8校の児童数の合計は157名、一学年平均は30名

毎年10回程度実施する集合学習



に満たない。

学校は、子どもたちの未来保証のために存在すると先述した。子どもたちが大人になったときの望ましい社会(集団)をどう創るか、また集団の一員としてよりよく生きていくための基礎・基本を学ぶ

学習活動は、小規模校では、難しい。そのために8校が集まって同時に学習する「集合学習」を継続してきたのである。

各学校単独での学習活動も大切であるが、少子化が進む地域では、地域の子どもたちが集い学ぶ行事・広場をいかに多く創っていくか、また「集合学習」を多く取り入れ、子どもたちが共に学び、切磋琢磨し、練り合い高め合う場を積極的に創っていくことが求められているように思う。

東小・南小・天谷小を統合

松山市中島地区は六つの有人島からなる。小学校は中島本島に3校、ほか各島に1校ずつ、全8校。中学校は中島本島に中島中学校1校(92名)のみ。

中島本島にある東小・南小・天谷小の

3校を統合し、新たに小学校を新設することが、平成15年12月の中島町定例議会決定。合併協議会では、この統合案を引き継ぐこととし、平成21年4月に開校することとなっている。

統合には痛みが伴う。小学校は、それぞれの地域のコミュニティセンターであること、また、母校がなくなることを同窓生の切ない思い、過疎化に拍車がかかるのではないかとという危惧の念など、様々な思いが交錯する中で、先述したように、学校は「子どもの幸せのため」「子どもの未来保証のため」にあるべきだとの思いで、苦衷の英断をしたのだった。

すでに、三つの小学校の代表者等からなる校歌・校章・校訓・校則などの制定委員会が発足し、開校に向けての話し合い活動が続けられている。平成21年の開校記念の日には、高らかに子どもたちの歌う校歌が響き渡ることとなっている。

中島地域全体が一つの学校という活動

子どもは地域の宝であり、未来からの贈りものである。地域の中で子どもは育っている。少子化のすすむ中島では、ふるさと中島全体をふるさとの学校としてとらえる多彩な活動も活発に行なわれている。一例だけあげる。たとえばピオ

トープを活用した稲作体験。島の小中学生が参加し、田起こし・しろかき・田植え・稲刈り・脱穀すべて休業日に行う。採れたもち米は、餅つきをし、特養や同居老人宅等へ届ける。作った餅を自分たちで食するのではない、地域の人々へかえすのである。「心の教育」の実践である。苦しきから逃げず、地域のために生きる、ふるさと中島全体を教室とした実践を今後も続けていきたい。

松山市は、日本一のまちづくりを目指しているが、私は中島の教育を「日本一の教育」実践であると自負している。



かゆいこと、しんどいことにも挑戦。ピオトープを活用した稲作体験